

Title	あの頃の私たちのこと
Author(s)	藤井, 治彦
Citation	Osaka Literary Review. 20 P.1-P.3
Issue Date	1981-11-30
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25588
DOI	10.18910/25588
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

創刊二十周年記念特集

Osaka Literary Review は本号で創刊二十号をむかえました。それを記念して創刊当時の同人の方々に原稿を寄せて頂きました。

(掲載の順序はアルファベットの順です。)

あの頃の私たちのこと

藤井治彦

Osaka Literary Review が第20号を刊行するという。創刊以来ほぼ二十年の歳月が流れたわけである。この雑誌を最初に計画した者の一人として、いささかの感慨なきにしもあらず、発刊当時の甘くまたほろ苦い思い出を語ってみたい。

阪大の英文科の院生の中で雑誌を作ろうという話が持ちあがったのは昭和36年(1961)の夏か秋であったように思う。ただし、それは私たちの間にひとつの学派の意識とか、共通の文学上の主張があったからでは決していない。私たちは就職しなければならず、就職するには、いわゆる業績が必要であり、そのためには自分たちで雑誌でも作るほかなかったのである。従って私たちには(少なくとも私には)純粹な意味での同人雑誌を作ろうというような、ロマンティックな気持は全くなかった。業績がなくても、大学の名や先生の推薦だけで院生を就職させる力は阪大の英文科にはそのときも、今も、ない。

雑誌を作るには一方では資金が必要であり、他方ではなるべく安い印刷所を見つけなければならない。最初の頃の会費がいくらであったか忘れてしまったが、私たちはそれを月々積み立てる方式を考えた。森晴秀君が会計として回数券のような領収証を考案し、私たちは一ヶ月分の会費を納入するごとに、その一枚をうやうやしく受け取ったのであった。

森晴秀君といえ、私は、彼と二人で安い印刷所を探すために、大阪の

中央郵便局から職業別電話帳でいくつもの印刷屋に電話をかけ、目ぼしいところへ出かけて行って交渉した日のことを思い出す。暑い日だったような気がするが、あれは昭和36年の残暑のなかであったのだろうか。大阪駅前から市電に乗って都島の方へ行こうとすると、森君は私が調査に熱心であることを意外として褒め、同じ熱意をもってすれば私の学問もまた成功するであろうと予言してくれた。しかし、最初の印刷所は村上至孝先生に紹介していただいたところになったのではなかったか。そして創刊号の編集その他一切の雑務を引き受けてくれたのは森君と梅垣清君であった。

雑誌の名を決めた日のことはかなりよく憶えている。*Osaka Literary Review* か、*Pegasus* かという話になった。*Pegasus* は倉谷直臣君が主張したと記憶する。しかし、私は *Pegasus* では同人誌臭が強すぎて、内容が軽く見られるおそれがあると思ひ反対した。石油会社の商標を連想させるとも思った。そのことも反対の理由として口にしたかもしれない。

創刊号は、内容はともかく、体裁においては上々の出来栄であった。私は何人かの人からきれいな雑誌だと評されたことを憶えている。そしてそのことは私たちの運命に多少とも有利に働いたはずである。私は創刊号に「*Lycidas* ——ひとつの解釈」という小論を書いた。今、その号を取り出してみると、斎藤俊雄君がOEの関係詞を、藤田実君がシェイクスピアを、森君がロレンスを、耕田良一君がアイルランド演劇を論じている。私たちは20年の間、それぞれ、同じことを論じ続けてきたのだろうか。いささか恥ずかしい気がする。

その頃、日本英文学会の『英文学研究』に紀要論文について匿名で批評をおこなう欄があった。私は *OLR* の小論のおかげで、そこで初めて先生や友人以外からの批評を受けたのであった。「短いが興味ある論文である。その意味は、著者が…率直に、直接的に作品を読もうとしているからである。…平凡なことを知っていることとそれを内的に理解していることは別ものであることを著者はわきまえている。そういう理解の集積ができ上がった時、もう一度 *Lycidas* 論を試みたらもっと solid なものになるだろ

うと思う」という暖かいことばは私の心に染みだ。この批評を書いて下さったのはどなたであったのだろうか。私は今もこのはげましに深い感謝の念をいだいている。

*OLR*は私たち第一世代の者が大学院を離れたのちも順調に刊行されていた。しかし、あるとき、私は現役の院生が卒業生の存在を不必要に大きく感じていることに気づいた。それは遠慮と甘えを生む。私は古いメンバーにそのことを告げ、私たちは第10号(1971)を最後に、(いいかえれば、今日までの歩みのちょうどなかばのところで) *OLR*を去った。

その後、私は現役の諸君に、*OLR*の印刷と体裁が悪くなっているから、少しその点を考えてみてはどうかと忠告したことがあった。その結果、第16号(1977)からは新しい形になり、現在に至っている。この改善については、印刷をお願いしている正栄堂の北川宏氏の御好意によるところが大きい。このことを知っている人はあまりいないと思うので、この機会に特に記してお礼を申し上げたい。

私は院生諸君が *OLR*を十分に利用し、そして健全な姿で次の世代へ引き渡して下さるようにと切に望む。十年後、二十年後にもなお、*OLR*が刊行され続けているとすれば、それはさぞ愉快的なことであろう。